

ひと し もの ち おのれ し もの めい ひと か もの ちからあ
人を知る者は智なり、自を知る者は明なり。人に勝つ者は力有
り、自に勝つ者は強し。足るを知る者は富む。強めて行う者は
志有り。其の所を失わざる者は久し。死して而も亡びざる者は
いのちなが
寿し。

【大体の意味内容】他者を知るということは知恵の働きであり、自分を知るということが「明
らめ」の働きである。(本来、「あきらめ」とは、「途中で断念すること」ではなく、極限まで
努力探求して、物事を「明らかにする」ということである)。腕力や武力などの力があれば、
他人にうち勝つこともできるが、それだけでは自分にもうち勝つことはできない。自分にもうち勝
つことができるものが、本当の強さである。不足・不満を託つことなく、自分がどのような境遇
にあると、「身の周りの大宇宙も、自分の身体という小宇宙も、完全無欠で満ち足りている」
と知るものが、本当に豊かな富に恵まれているのだ。強めて努力し続ける者には、誰も破壊す
ることができない 志が備わっている。 志をもって自分の生き方・在り方を失わない者
は、永久不変の命脈を保つ。たとえ死んでも、その 志を受け継いだり、その人を記憶する
人々がいる限りは亡んだことにはならず、永遠不滅の寿命を保つことになる。



中3生が修学旅行で行った京都に、「石庭」で有名な竜安寺があります。行
きましたか？ 蔵六庵という茶室の入り口近くに「知足の蹲踞」という手洗い
場があります(写真参照)。□の字の穴に湛えられた水で手を清めます。この「□」
の周りに文字が入っているのがわかるでしょう。どれも「□」を含んだ漢字に
なっていて、上から右回りに四文字熟語になっています。「吾唯足知」すなわ

ち「吾唯^{わがただ}足^{たり}るを知る」です。老子の「足^{たり}るを知る者は富^いむ」からきていますが、後世^{ごせい}、仏教の禅宗思想に取り入れられて

「貧^ひしくても欲^ほしがらず欲^ほ張^{ちやう}らず」、すでに自分は満ち足りているとわきまえることが本当の富である。たとえ金持ちでもやたらと不満で欲^ほ張^{ちやう}る者は、本当は貧^ひ者^{もの}なのだ」

という風に解釈されるようになりました。それもいいのですが、「道」を追究する老子の思想はもっと氣宇^{きう}壯大^{さうだい}、スケールの大きなものだと思います。

この大宇宙^{だんそふ}には不足しているものなど何もない、ありとあらゆるもので満ち足りている。生きとし生けるものはその根本原理たる「道」の働きに即して生命活動(生活・生命運動(運命))を営んでいる。

私たち一人一人の身体や、どんな小さな生物の一個一個までもがすべて小宇宙^{せうそふ}である。どれもすべて

がつながっており、何も欠如^{けつじょ}などしていない。私たちは皆、大宇宙と一体なのだ。大宇宙の意思によって生かされている。いや大宇宙の意思こそが、自覚していなくとも自分の本当の意思なのだ。それを知ることが富^{とみ}である。

満天の星空の下、体を開いて両手を大きく広げて大宇宙と一体になってみてください。宇宙からの波動^{小宇宙}に身体の中の様々なものが共鳴したのを感じるはずですよ。

自分の身辺近くに何かがなかったとしても、あるところにはあるのですからそれを利用すればいい。「私物」は少なくとも「公共物」は無限にあるし、それらも実は、私のものでもあるには違いないのですから。